



家庭婦人バレーボールの人類学的研究

著者	高橋 美波
雑誌名	東北人類学論壇
号	11
ページ	63-75
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/56303

家庭婦人バレーボールの人類学的研究

高橋 美波

1. はじめに

本研究の目的は家庭婦人バレーボールチームの一団体を対象として、その活動を民族誌的に記述・分析をすることにより、主婦の集団による活動の現状と意味を明らかにし、さらにはその展望について検討することである。具体的には、家庭婦人バレーボールチームの活動と、ロジェ・カイヨワ（1990 [1958]）の「遊び」理論、上野千鶴子（2008）の「女縁」理論とをそれぞれ比較検討する。カイヨワは、遊びの基本定義を6つ挙げた。上野は、女性が仕事場とも家庭とも違った場所に作り出した活動を「女縁活動」と呼んだ。

家庭婦人バレーボールに参加する女性たちは、それぞれ家庭を持っている。中には、フルタイムで勤務する女性もいる。また、私が家庭婦人バレーボールチームでのフィールドワークを行った際に、あるメンバーが自らの活動を「遊び」だと形容したことがあった。このことから私は、家庭婦人バレーボールは家庭も仕事もある女性が参加するが、それらと全く関係のない活動なのか、また、それは遊びと呼べるのかに興味を抱いた。

このことから、家庭婦人バレーボールが遊び、女縁活動に当てはまるのか、当てはまらないところがあるのならその原因は何なのかをメンバーのもつ主婦性に着目した上で分析する。

2. 問題の背景

ここでは、まず本研究の民族誌的背景として、主婦の誕生及びその変遷について記述する。次いで、理論的背景として上野による女縁、及びカイヨワの言及する遊びについてそれぞれ記述する。

(1) 主婦の誕生とその変遷

まずは主婦の誕生について、落合恵美子（1994）の研究に依拠してまとめてみよう。日本における主婦の成立は大正時代、特に第一次世界大戦後にまでさかのぼる。第一次世界大戦後の好況期、産業化が急速に進展した。それに伴い、大組織の管理的労働を担う俸給

生活者、いわゆるホワイトカラーのサラリーマンが大量に生まれた。彼らは、郊外住宅地に住み、市電に乗って通勤するようになった。それまでの既婚女性は、仕事場と家庭が一緒になっていて、家族と共に働いていた。「農家の嫁」や、「自営業のおかみさん」などがその例である。しかし、サラリーマンが増加したことにより、夫は職場へ、妻は家庭へという公私の分離が起こった。この生活様式の変容により主婦が誕生したのである（落合 1994）。

次に、専業主婦化した女性たちの活動の多様化について、国広（2001）の研究に依拠してまとめてみよう。国広は、既婚女性の多様化を促した要因として、1970年代には普及率がほぼ100%に達した電化製品による家事の省力化、家事の商品化・外部化がもたらした時間的余裕、高学歴化による自己実現願望や社会参加意欲の高まりなどを挙げている。その結果、1965年には既婚女性のうち6割が無職者であったのが、1979年から1982年の間にその割合は逆転した。

また、主婦アイデンティティの危機に関する公的言説が急増したのもこのころである。主婦役割の中でも母親役割を重視する日本女性の場合、子供が自立し子育てから解放される時期に、自分は何者なのか、というアイデンティティ不安が起きやすくなる。このような危機に直面した主婦たちは、自らの生き方を変えることを目指した。その結果、福祉活動や教育関連活動など、就労以外の社会参加も増えた。特に1980年代以降、各地の生涯学習施設や女性センターで開催される企画には中年期の既婚女性の参加が多く、企画が終わった後も自主的にグループを作り、学習活動が続ける例も見られた。主婦の座を利用して社会参加を果たす主婦、育児が一段落した後の世帯内での役割喪失、つまり主婦アイデンティティの危機から新たな生きがいを求めて家庭の外に向かう主婦など、主婦の多様化が進展したのが1980年代の日本なのである（国広 2001）。

（2）女縁について

ここでは、上野（2008）による女縁の定義についてまとめておこう。高度経済成長を迎えた1950年代半ばから1970年代初頭にかけて、社会環境の変化により女性は専業主婦化した。彼女達は家の中にいるばかりではなかった。上野はそのことを指摘し、外に出歩くようになった専業主婦を『外さん』化した脱専業主婦と呼んだ（2008：11）。「外さん」とは、家から出て活動するようになった女性達がいまや24時間家の奥にいない状態を指し、「奥さん」の対義語として上野（2008）が作り出した言葉である。また、「脱専業主婦」とは、家の中にはいないが、兼業主婦のように外で金を稼いでくるわけではない主婦のことを指している（上野 2008：5）。カルチャースクールは月謝などコスト

がかかり、受講生の年齢層も高い。その代わりに脱専業主婦が作り出したのが、「カネのかからない手づくりの活動」だ。このような活動は、旧来型の地縁・血縁の人間関係が解体した後に生まれた新しい都市型のネットワークである。上野は、この新しいネットワークを「選択縁」と名づけた。

主婦がこれまで属していた縁の集団と選択縁の集団との相違点は、個人の顔で出られるか否かである。主婦がこれまで出歩く先は、学校や地域などの集まりであり、そこでは主婦は「〇〇ちゃん／くんのお母さん」や「××さんの奥さん」として知られていた。そのような集団から離れると、主婦はどこの誰なのかも分からない「奥様」扱いされた。選択縁の集団では、参加する女性は誰かの妻や母であっても、匿名の「奥様」ではなく「〇〇さん」という個人名で存在できる。すなわち、女性が妻でも母でもなく個人になれる場所が選択縁の集団なのである。そして、上野は特に女性によって創り出された選択縁を、「女縁」と定義し、女縁の担い手を「えんじょ（縁女）いすと」と名付けている（上野 2008：11）。

子供を通じてつながりあった女縁は生活密着型になりやすい。子供の年齢が近いこともあり、子供の成長に応じてその都度相談し合える。それに対して、趣味やココロザシなど自分のためのことが契機で集まった女縁は生活密着型のモノやサービスをあえて避ける。旅行のお土産のおすそわけやモノの貸し借りも行わない。せっかく日常を脱出して女縁活動をしているのだから、お互いの家族状況にも深くは立ち入らないのである。

(3) 遊びについて

次に、カイヨワ（1990 [1958]）に依拠しながら、従来の遊びの定義を行う。カイヨワは、遊びの基本的な定義として以下の6つを挙げた。すなわち、強制されない自由な活動であること、時間と空間において隔離されていること、展開や結果が未確定であること、非生産的であること、規則があること、現実や日常から離れた虚構であること、である。つまり、本質的に生活の他の部分から分離され、注意深く絶縁されていなければならないこと、財産や富など、いかなる種類の新要素もつくり出さないということ、現実から遠ざかって行うということ、である。

(4) 小括

上野は、彼女の定義の中で「外さん」という言葉を使っていることから明らかなように、女縁活動を、家という日常から脱出し、妻でも母でもない個人と化した女性たちが作り上げるものだと指摘した。また、カイヨワは、遊びを現実世界から切り離されたところで行

う活動だと定義した。果たして家庭婦人バレーボールとは、妻でも母でもない女性たちが、家という日常や現実から遠く離れたところで行う活動なのだろうか。実際のフィールドからこの点について考えてみよう。

3. 家庭婦人バレーボールチーム—チーム N を事例に

(1) 家庭婦人バレーボールの歴史

まずここでは、日本における家庭婦人バレーボールの歴史について、内海和雄 (2001) の研究に依拠してまとめる。家庭婦人バレーボールが始まった背景には、1964 年の東京オリンピックがある。当時、日本国内での女子バレーボールの人気は大変高く、日本代表、いわゆる「東洋の魔女」は金メダルを獲得した。それ以降、主婦のバレーボールへの参加欲求は高まり、小学校の PTA などでも母親たちがバレーボールを楽しむようになった。最初は学内での交流が目的とされていたが、やがて校外対抗戦へと発展し、大会規模も地域から県単位へと拡大していった。こうした状況の中、企業からの援助申し入れがあったことも手伝い、1970 年に第 1 回全国家庭婦人バレーボール大会が東京の駒沢体育館で開催された。また、大会に先立ち、1968 年に東京都家庭婦人バレーボール連盟が設立された。

全国家庭婦人バレーボール大会の地区予選の参加チームは、第 1 回大会の行われた 1970 年には 855 チームだったが、1980 年には 5230 チームにまで増えた。第 1 回大会と 2 回大会は財団法人東京都バレーボール協会と東京都家庭婦人バレーボール連盟が中心となって開催されていたが、1982 年から全国家庭婦人バレーボール連盟が主催者に加わり、現在に到っている (内海 2001)。以下、実際に私が調査を行ったチーム N について記述する。

(2) 概要

チーム N は 1973 年秋に創設された 9 人制の家庭婦人バレーボールチームである¹。チーム N のメンバーは現在 11 人である。全員がバレーボール経験者であり、仙台市太白区に居住している。メンバーのうち 4 人が専業主婦である。メンバーの年齢は 30 代から 50 代である。年齢はばらばらであるが、互いにあだ名や下の名前で呼び合っている。例えば、名前に「子」が付くメンバーは「子」を抜いて、名前に「子」の付かないメンバーは名字をもじったあだ名や名前で呼ばれる。そこに年齢による序列がまったくないというわけではなく、年上のメンバーにはあだ名に「さん」を付けて呼び、年下のメンバーにはあだ名

¹ 家庭婦人バレーボールには、9 人制の他に 8 人制のものも存在する。

に「ちゃん」を付けたり、名前を呼び捨てにしたりする。

家庭婦人バレーボールはママさんバレーという愛称でも知られているため、メンバー全員に子供がいると考えがちである。しかし、チーム N への入団条件は結婚歴がある女性ということだけであり、子供の有無は問われないし、実際にメンバー S さんには子供はいない。もちろん練習に子供を連れてくるメンバーも何人かいて、メンバーの子供同士で遊んでいたりと、練習の合間にメンバーと話していたりする²。

練習は、毎週火曜日と土曜日に太白区を中心とした仙台市内の市民センターで行われている。練習日は以前は火曜日と金曜日だったが、フルタイムで勤務する人が増えたため、金曜日から土曜日へと変更した。練習時間は午後 1 時から午後 4 時 30 分までである。市民センターの利用費は、1 人につき 1 か月 1500 円の部費でまかなわれている。チーム N の活動は、練習と試合である。

(3) 練習について

ここでは、チーム N の活動の 1 つである練習について記述する。練習には、単独練習と合同練習がある。単独練習は文字通りチーム単独で練習するものであり、合同練習は他のチームと行うものである。チーム N の練習は、合同練習の相手のチームが急にキャンセルしたなど特別な場合を除いてはほとんどが合同練習である。そのため、ここでは合同練習の日の流れについて記述していく。

午後 1 時になると、市民センターの体育館に、ジャージ姿でスポーツバッグを提げたメンバーが集まりだす。ネットを張ったり、日差しが強い日は窓の暗幕を下ろしたり、その日の気温に合わせて冷暖房をつけたりと準備を行う。それが終わると靴を履き替えたり、サポーターを膝や肘につけたり、指にテーピングを巻いたりといった個人の準備をする。体育館の床に座ってその光景を眺める私に、メンバーは次々と「寒くない？」と尋ねてきて、時には「床は冷たいからこれに座りなよ！」とパイプ椅子を持ってきてくれる。

この準備の時間に、いくつか興味深い場面が見られる。例えば、メンバーの 1 人 Y さんが瓶詰めの鮭フレークのようなものをメンバーに配り、お金をもらっていたことがある。この瓶の中身は、ある試合の際に持参したお弁当のおにぎりに使っていた具である。このおにぎりがメンバーに好評だったため、メンバーの代わりに彼女が一括で購入した、というわけだ。

また他の日には、Y さんが H さんにビニール袋に入った何かを渡していた。Y さんは「これねー、ジャムなの。職場の人にもらったんだけど、うち子供もジャムあまり好きじゃな

² 他のチームでも同様の傾向が見られる。

くて食べないからさー。良かったら（もらってね）」と言い、Hさんは「わー！うちジャム食べますー！ありがとうございますー！」と言って受け取っていた。また、Yさんは私にお菓子をくれた。「これ職場の人にお土産でもらってさー。うちあまり食べないから子供たちに、と思って持ってきたんだけど、子供たち来てないから、良かったら美波ちゃんどうぞー」ということであった³。

またある日には、Kさんが娘Aちゃんのおさりの小物をCさんにあげたり、職場でもらったカレンダーをメンバーに配ったりしていた。カレンダーは私ももらった。このように、チームNではメンバー同士でモノのやりとりが日常的になされている。

練習の準備が整うと、各自サーブ練習をする。子供の話、仕事の話などをしながら、和やかな雰囲気である。例えば「うちの息子、こないだテストで5教科合計で450点くらいとってきたんだよねー」とIさんが言うと、「お父さんが違うんじゃないの?」「もしかしたらお母さんも違うかもね」とからかいの声が飛び、笑いが起こる。

午後1時30分頃になると、チームごとに整列し、ネットをはさんで相手チームと「こんにちは、よろしくお願いします」と挨拶をする。そして柔軟や腕立て伏せなど体操を開始する。メンバーの子供たちも一緒に体操するときもある。体操は全員で「1、2、3、4、5、6、7、8」と声を揃えてカウントを取りながら行う。それが終わると円になって欠席や遅刻や早退をするメンバーの確認や、どんな練習をやりたいかなど今日の練習のことについて雑談も交えながら話す。円陣を組み、キャプテンNさんの「〇〇！（〇〇にはチーム名の一部が入る）」という音頭に合わせ、「よろしくお願いします」、と全員で気合いを入れる。

その後コート内を時計回りに何周か走り、キャプテンNさんから「反対」の声がかかると、逆時計回りに何周か走る。子供たちが一緒に走るときもある。メンバーのHさんの娘Yちゃんはまだ2歳なので、HさんがYちゃんを抱いて走るときもある。

その後2人組になってボールを使ったウォーミングアップを行う。誰と組むかは特に決まっておらず、「じゃあやるかー」「お願いしまーす！」と各自声をかけながら2人組を組む。ウォーミングアップの内容はキャッチボールに始まり、レシーブやトス（それぞれ長め、短め）、強打のレシーブ、数歩走りこんでからのレシーブやトスなどである。キャプテンNさんの「ラスト」という声掛けがあった後、各組きりのいいところで、午後2時頃にウォーミングアップ終了となる。

ウォーミングアップ終了後は、水分補給やトイレ休憩を挟んでから、チームでの練習を行う。ウォーミングアップと違い、練習の内容は固定されていない。前の週の試合や練習

³ この日の練習にはたまたま子供たちは来ていなかった。

で足りなかったところや、強化したほうがいいと思ったところを練習する。

練習は、右側ポジションと左側ポジション、前側ポジションと後側ポジションなど、チームを半分に分けてやることが多い。その場合、練習していないほうのメンバーはボールを打つ役になったり、ボール拾いをしたり、ストップウォッチ係を務めたり、子供たちが遊んでいるところのそばに立って、さりげなくボールから子供たちを守ったりしている。

Y ちゃんがぐずり、H さんがどうしても手が離せない時には、手の空いているメンバーが抱き上げてあやしている。C さんやH さんなど子供を連れてきているメンバーは、我が子が「ねえねえ、チョコ食べていい？」と言うのに対して「さっきグミ食べたんだから、もう3時までは食べたらだめ」と言っていたり、「コンビニ行ってお菓子買ってきたい！」と言われたら、お小遣いを渡して「車に気をつけて行ってくるんだよ」と声をかけたり、散らかったごみを見て「片付けなさい！」と言ったりしている。また、H さんは娘のY ちゃんがまだ母乳を飲んでいた頃には、練習中に体育館の隅で授乳を行っていた。

ある日の練習では、C さんの子供G くんが「ボールで遊ぼう！」と言うので、私は「いいよ。でもはじっここのほうで転がして遊ぼうね」と答えた。するとG くんは「うん！（練習中のコート内に）ボールが入ると誰かが踏んで、転んで血がいっぱい出るから危ない。だからボールで遊ぶのは（コート内で試合や練習を）やってない時だけ！」と言っていた。練習中の遊び方について、子供たちが母親からよく言い聞かせられていることが分かる。

また、チーム練習の合間には、K さんやS さんがY ちゃんに「（Y ちゃんが持っているお菓子を）Y ちゃん、ちょーだい！」などと話しかけたりしていることもあった。小さな手でお菓子をあげるY ちゃんを見て、メンバーは口々に「かわいいねー」「やっぱり女の子はかわいいなー」などと言っている。

チームごとの練習を30分から40分ほど行った後は合同練習に入る。はじめは両チーム入り混じってポジション毎にスパイクを打ちたいところに並び、スパイクを打つ。後ろ側ポジションの人はトスを上げたり、レシーブをしたり、ボール拾いをしたりする。

それが終わると試合形式の練習が始まる。点数はラリーポイント制で、21点先取したほうがそのセットの勝者となる。3から4セットほど行い、午後4時近くになると、「あと3点くらいで終わりにしよう」などと声をかけ、きりのいいところで試合形式の練習を終える。その後は円になって柔軟を中心とした整理運動を行ってから、円陣を組んでキャプテンN さんの「○○！（○○にはチーム名の一部が入る）」という音頭に合わせ、「ありがとうございました」、のかけ声で練習が終了となる。ネットやボールなどを片づけ、体育館にあるモップで床を拭き、着替えが終わった人から退室する。練習が終わって思う存分体育館を使えるようになった子供たちは、思いのままにあたりを走り回っている。

全員が体育館から退室した後は、テーブルと椅子が置いてある市民センター内のスペースでお茶会を行う。飲み物はたいていコーヒーや紅茶であり、片づけ中に用意をしておく。コーヒーのお供は、メンバーが買ってきたお菓子、M さんの手作りのパウンドケーキやきゅうりのしょうが漬けなど様々である。M さんが家庭菜園で収穫したゴーヤを配っていた時もあった。旅行から帰ってきたメンバーがいる週の練習後は、お土産が提供されることもある。私もお土産を持参したことがある。

お茶会は雑談が中心であるが、今回の練習に関して「子供の学芸会があるから遅れる」、「夫の両親が来るので休む」、「サッカーチームの試合を観に行くため休む」、「会社の忘年会があるので早退する」など、遅刻・欠席・早退の予定を報告するメンバーがいるときもある。遅刻・欠席・早退についてメンバーの反応は寛容で、家庭の事情以外で遅刻・欠席・早退する場合でも、非難されたり、嫌みのようなことを言われたりすることは全くない。A さんが「仕事が忙しくて少しチームを離れたい」という申し出をしたときも、キャプテン N さんは小言を言うことも引き留めることもなく了承していた。「バレーでお金がもらえているわけではないからね。仕事が優先だね」と言っていた。

雑談の話題は、主に子供や家庭の話が中心となる。お茶会が終わりに近づいてくると、誰かの「あー、今日のご飯何にしよう!」という一言から夕食についての話が始まる。誰かが S さんに「S さんはもう帰ったらご飯用意してあるの?」と尋ねると、S さんは「もちろん」と即答していた。S さんの夫 W さんは飲食関係の仕事をしていて、家庭での食事だけではなく、時には練習後のお茶会で食べるものや、試合の際に持ち寄る昼食まで作るという。だからといって、夕食の話など家事にまつわる話の際に S さんが話題に混ざれないかということ、そうではない。例えば B さんが「うちは今日すき焼きだよ」と言うと S さんは「あ、じゃあ今日はみんな B の家に箸持って集合ね」と言い、「私、卵持っていくわ」、「N さん肉持ってきてください」、「お皿はいりませんか?」、「うちもすき焼きにしようかなあ」と次々と他のメンバーが話に乗ってくる。

子供たちも一緒に座ってお菓子を食べている場合が多い。私もお菓子を食べているが、ひたすら話を聞いている。私は子供がいるわけでも、夕食を作らなくてはいけないわけでもない、特に口を挟む余地がないからだ。早く帰るメンバーが多い日は早めに解散となるが、基本的に 30 分から 1 時間ほどコーヒーや紅茶を飲み、雑談をしてから解散となる。余ったお菓子は小さい子供が家にいるメンバーが持ち帰ることが多い。私もいくつかもらえる。

(4) 大会について

ここでは、大会について記述する。大会には大きく分けて県の大会と市の大会がある。両大会は運営の母体が異なっていて、前者は宮城県家庭婦人バレーボール連盟が、後者は仙台市家庭婦人バレーボール連盟が主催している。市の大会は基本的に休日に行われるが、県の大会は平日に行われる場合もある。大会はおおむね朝 9 時頃の開会式に始まり、夕方 5 時頃の表彰式で終わる。家庭を持つ女性たちに配慮した時間構成となっている。

ただ、例外的に全行程の終了が午後 8 時頃と、かなり遅い時間になったことがある。この時は、チーム N のメンバーは日が沈む頃になると、「今日はちょっと遅くなりそうだから」、「冷蔵庫に昨日の夕飯の残りが入ってるから、それを食べて」などと、自宅にそれぞれ連絡をしていた。

平日に行われる大会では、小学生以下の子供を持つメンバーは朝に子供たちを送り出してから向かわなくてはならないので、チームの集合時間より 1 時間近く到着が遅れていた。Hさんは、通常は Yちゃんと、その世話役として Yちゃんの兄の Kくんを連れてくる。しかし平日の大会だと Kくんが小学校に行かなくてはならないため、Yちゃんを保育園に預ける。しかし、どこの保育園も一時預かりは満員で、4 つ目でようやく空いている保育園が見つかった、と言っていたこともあった。開会式での開会の言葉の際に、「よくみなさん家庭をおいてやってきました」という話がされたり、幼児の動向に常に気を配るようにと注意がされたりする。

大会はトーナメント形式で、勝ち進めば次のゲームもできるが、負けたらそこで終わりである。試合では、チーム Nに限らずどこのチームも活発な声出しが行われていて、得点が入るとチーム全員でコート中央に集まり喜ぶ光景も見られる。また、ミスをした際も笑いが起こり、チーム Nの普段の練習のように和やかな雰囲気では試合は進行する。しかし、観覧席に応援をする人はあまり見られず、どこのチームもほとんどのメンバーが試合に出ている（すなわち、チームの人数が多くないため控えの選手がほとんどいない）ため、応援の声はあまり聞こえず、試合会場にはメンバーの声と主審の吹く笛の音が響いている。得点係や線審は、試合のないチームのメンバーが行っている。体育館内に複数のコートを設け、並行して何試合が行うのだが、コート間の距離が狭いため、他のコートのボールが入ってしまいゲームが中断してしまうこともある。

大会の際に特徴的なのが、昼食の持ち寄りである。トーナメントで勝ち進めば、終わるのは夕方頃になるため、朝早くから運動しているメンバーたちはもちろんお腹がすく。昼食は、メンバーが各自、家で作って持ち寄る。そして、メンバーが持参したプラスチックの皿や割り箸を配り、各自が食べたい料理を自由に皿に盛り付け食べる。その種類は、ド

リア、お好み焼き、おにぎり、唐揚げなど様々である。たいていは食べきれずに余ってしまう。そこでメンバーは「これが今日の夕飯だなー」などと言いながら、各自タッパーに詰めたいものを詰めて持ち帰る。他のチームでも同様の傾向が見られる。

前述したように、試合の際の観覧席には、選手の家族などはあまり見られず、試合までの空き時間を他のチームの試合を見て過ごす選手たちで埋まっている。選手が連れてきた子供たちが走り回っていたり、椅子に座っていたり、寝ころんでゲームをしたりしているのは見られるが、選手の夫が応援をしている様子はあまり見られない。会場にいる子供たちも、応援のためにやってきているのではない。選手が子供を家に置いておけないからという理由で連れて来ているのである。チーム N でも、前述したように H さんが Y ちゃんやその世話役として K くんを連れて来ているが、家族が応援に来ているという話は聞いたことがない。

(5) 小括

チーム N のメンバーの年齢は様々であるが、現在は和気藹々と活動をしていて、互いにあだ名や下の名前呼び合っている。基本的に入団、長期休養、脱退、練習の遅刻・欠席・早退に関しては個人の意思が最大限尊重される。

練習時には、子供のおさがりや食べ物など、モノのやりとりがなされている。練習中は子供のことなどを話し、和やかな雰囲気である。子供を連れてきているメンバーはもちろん、子供を連れてきていないメンバーであっても、練習中は常に子供たちの動向に気を配っている。練習後のお茶会では、手作りのお菓子やおみやげが提供され、子供のこと、その日の夕食のことなどで話が盛り上がっている。

大会は主に休日に行われる場合が多いが、宮城県家庭婦人バレーボール連盟が主催するものは平日に行われる場合もある。その場合、小学生以下の子供を持つ親は、子供を学校に送り出してからチームでの集合時間に少し遅れて行かなければならなかったり、子供を保育園に預けなくてはならなかったりと負担がかかる。大会はおおむね午前 9 時頃から午後 5 時頃まで行われる。遅くまでかかる際は選手たちは各自家に連絡をしなければならぬ。昼食は各自が家で作ってきたものを持ち寄り、余ったら好きなものを持ち帰って、その日の夕食にする。応援のために選手の家族が来ることはほとんどなく、試合会場にいる子供たちは、選手の「子供を家に置いておけないから」という理由で連れられてきている場合が多い。

4. 結論—遊び・女縁から見る家庭婦人バレーボール

ここでは、遊び・女縁という観点からチーム N の活動について考察する。

チーム N の活動は、「〇〇ちゃん／くんのお母さん」などとは言わず個人名で参加でき、入団、長期休養、脱退、練習の遅刻・欠席・早退に関しては個人の意思が最大限尊重される自由な活動である。また、バレーボールをすることでお金がもらえるわけではないが、主な支出は部費のみであり、その部費も 1 か月 1500 円と決して高額ではない。これらのことから、チーム N の活動は遊び・女縁であるかのように思える。しかし、チーム N のメンバーが、カイヨワや上野の言うように、日常から切り離されて活動しているとはいえない。なぜなら、練習中에서도育児に励むメンバーがいるからである。我が子のごみを散らかしていたら注意したり、買い物に行きたいとせがんできたらお小遣いを渡し、車に気をつけて行きなさいと諭したりする。このやりとりは母と子の生活の中で何度も何度も行っているやりとりである。いくらボールに食らいつき、仲間に声をかけ、練習に没頭していたとしても、メンバーが我が子を見つめた途端、生活とバレーボールとの境界線は見えないくらいに薄くなってしまうのだ。また、練習中に子供や夫についてのことなど現実の話もするし、お茶会では夕食のメニューを考えている。家で作った食事を試合の昼食として持参し、各自余ったものを持ち帰ってその日の夕食にするなど、チーム N の活動を生活にうまく取り込んでもいる。メンバーにとってチーム N の活動は現実から遠ざかってはいない。活動をしている際も、いつも現実世界の生活はすぐそばにあるのだ。チーム N は確かに女性が個人になれる場所ではあるが、メンバーが妻でも母でもない存在になっているとは言えない。そして、妻であり母であるからこそできることが多くあるのである。我が子たちに学校の友達とはまた別の友達ができること、メンバーから「子供たちに」とお菓子やお下がりの品をもらうことやあげること、同じ主婦という立場に立つ女性たちと様々な会話ができることがその例である。

ここで、チーム N で参与観察を行った私自身について考えてみよう。私は、完全にチーム N の一員となって活動することはできなかった。それは、私がバレーボールを経験していないことに加え、私に結婚歴がない、つまり家庭婦人バレーボールの大会の参加資格を持たなかったからだろうと考えている。家庭婦人バレーボールの大会で勝ち進むことを目標にしているチーム N に、結婚歴のないメンバーは所属できない。だからといって、私がチーム N のメンバーに冷遇されていたかという、そうではない。メンバーと会話ができたことはもちろん、練習後のお茶会のお菓子や試合時の昼食をもらって帰った。また、メンバーの話を聞くことはとても楽しいと思えた。しかし、私は彼女らと一緒に夕食の献立

に悩むことも、我が子の興味深い話をすることもできなかった。それは私が、妻でも母でもなかったからではないだろうか。妻でも母でもない個人として参加している私は、上野のいう「えんじょいすと」の理想の形だったかもしれない。しかし私には、チーム N の中でできないことが多かった。

つまり、チーム N で活動するにあたって、一見障壁に思われる主婦役割がなくなれば、活動に費やせる時間は増えるけれども、それと同時に、チーム N での活動の持つ「遊びとも女縁活動とも異なった活動である」という特殊性もなくなってしまうという矛盾が生じるのである。主婦だからしなくてはならないことが減ると、主婦だからできること、例えば我が子たちに学校の友達とはまた別の友達ができること、メンバーから「子供たちに」とお菓子やお下りの品をもらうことやあげること、家庭や職場から離れて同じ主婦たちと様々な会話ができることも減ってしまうというわけだ。参加者が、バレーボールをしたいという意志と主婦役割を担う者であるという状態とを共有することによって、家庭婦人バレーボールという文化が形作られるのだと考えられる。

最後に、家庭婦人バレーボールの意義について考えてみたい。家庭婦人バレーボールの意義としては、主婦アイデンティティ喪失の回避が挙げられる。「問題の背景」では、主婦は育児が一段落した後主婦アイデンティティを喪失してしまうという現象があることについて記述した。私は、家庭婦人バレーボールによって、こうした主婦アイデンティティの喪失をいくらかでも回避できるのではないかと考える。なぜなら、本論で見てきた通り、家庭婦人バレーボールは、主婦が主婦であることで成立している活動であり、そして彼女たちはそこに個人名で参加しているからだ。上野は、「せっかく日常を脱出して女縁に来てる」（上野 2008:132）というように、「えんじょいすと」は家庭や主婦役割とは全く切り離された場所や活動にアイデンティティの充足を求めると述べたが、家庭婦人バレーボールは、それとは対照的なかたちで、すなわち、あくまでも主婦としての居場所とアイデンティティを女性たちに提供しているのである。

引用文献

カイヨワ、ロジェ

1990[1958] 『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、東京：講談社（講談社学術文庫）。

国広陽子

2001 『主婦とジェンダー』東京：尚学社。

落合恵美子

1994 『21世紀家族へー家族の戦後体制の見かた・超えかた』東京：有斐閣。

高岡治子

2008 「家庭婦人スポーツ活動における『主婦性』の再生産—ママさんバレーボールの
発展過程と制度特性を中心に」『体育学研究』53：391-407。

内海和雄

2001 「『ママさんバレー』の実態と意義」『一橋論叢』125（2）：115-131。

上野千鶴子

2008 『「女縁」を生きた女たち』東京：岩波書店（岩波現代文庫）。